

住宅型老人ホーム利用者の暮らしの 自由について

「自由」とは何だろうか。あるいは、何をもって「自由」は「自由」足り得るのだろうか。法政大学の現代福祉学部にも所属する学生として、ひいては日本という国に住む者として、自分の中に確固たる回答を持っておきたい課題である。「自由」でありたい、「自由」であるべきだと考える人は多いと思うが、その「自由」について分かっていないことには、それを実現することは難しいだろう。それは私にしてもそうであるし、私以外の人々にも共通して言えるのではないだろうか。この先の日本を担うとされる若者であるところの私達にも、今までの日本を支えてこられた高齢者の方々に対しても、共通して言えるのではないだろうか。

今回、私達は「住宅型老人ホーム利用者の暮らしと自由について」というテーマで研修に取り組んだ。そしてこの研修で私は、他にもない「自由」について知ることができたと思う。

さて、このテーマを設定した動機についてだが、これは住宅型老人ホームの持つ特異性に注目したことによるものだ。住宅型老人ホームとは、老人ホームとしての機能と一般的な住宅としての機能を併せ持つ、一見相反した施設である。老人ホームの持つ特徴としては、利用者に対して安全な暮らしを提供することができる反面、不健全な生活習慣は管理のもとに規制されてしまい、個々人の抱く要望や個々人の健康状態が反映されない場合も多いことが挙げられる。一方一般的な住宅の持つ特徴として、個人がある程度自分の意思で好きなように生活習慣を決められるものの、認知症による生活力の低下や孤立化といったような危険が存在する可能性があることが挙げられるだろう。これらの相反した特徴を持つ住宅型老人ホームでは、どのようにして入居者にストレスフリーな環境を提供しているのだろうか。そこにはどのような「自由」があるのか。学びたいと思ったからである。

では、実際に研修先ではどのような取り組みをしていたのか。鹿児島に到着し歓迎会をしていただいた翌日、山下さんという方からお話を伺った。

山下さんからは、初めに「我が事・丸ごと」という考え方について説明をしていただいた。これは、これまで分野・対象者別に進められてきた縦割りの地域の支援の仕組みを見直し、地域住民を中心としたすべての関係者が『我が事』として、『丸ごと』対応できるような地域社会を、今後の日本社会が目指すべきイメージとして提示したものである。

「地域共生型社会の実現」を目標としたこの考え方を聞いた私は、当初懐疑的だった。元々地域共生型社会というものに、あまり良い印象を抱いていなかったからである。確かに地域住民の抱える福祉的な課題を、他の地域住民が寄り添いながら解決するという流れは理想的だと思う。しかし、いくら同じ地域で生活する住民同士であるとは言え、どうしても他人であることには間違いない。当人の抱える福祉的な課題は社会に問題があると思うが、それは行政に責任があり、地域住民の持つ責任はそこまで大きいものではないだろう。そうであるにも関わらず、地域住民同士による解決に

比重を置くという取り組みは、少々無責任なのではないだろうか。地域住民は税金を納めており、全く非協力的であるというわけでもない。これ以上地域の負担を増やすことに、私は少なからず抵抗があった。

しかし、今回山下さんのお話を伺い、そういった疑問を違う方面から考えることができた。それは、社会福祉法人の存在や、地域住民の生活における密接性によるものである。

先程も述べたが、地域生活に身近である住民同士が日々の変化に気づき、寄り添いながら支え合うことは理想的である。そして重要なことは、地域で生活を送る他者が抱える生活上の課題は、現在あるいは将来において自分やその周辺の人物が抱える課題となり得るため、結果的に他の住民が抱えている課題を解決することは、自分たちが暮らしやすい環境を作ることに繋がるのだ。これはまさしく『我が事』である。そしてその手段として、行政や社会福祉法人があれば良いのだと思った。元より福祉というものの自体、地域住民の訴えに大きく寄るものであり、行政はもちろん税金面において優遇措置を受けている社会福祉法人にも、地域住民の福祉的な課題を解決する責務がある。ある意味において、こういった取り組みは福祉本来の在り方とも言えるのではないかと思った。

また、マモリエあいらという特別養護老人ホームにも伺った。マモリエあいらさんの特徴として、家族的な生活サービスが挙げられる。マモリエあいらさんでは、利用者の方 10 人ごとに 1 つのユニットとして生活空間を区切り、1 つの家のような生活サービスを提供している。全室個室でありながらキッチンやリビングもあり、玄関には郵便ポストまである。家としてのユニット外の部分においても施設の外のように作りこまれており、観葉植物による自然や簡易的な池を用いた公園、美容院から喫茶店まであった。ユニットごとに配置する職員を変えるなど、家庭的な生活環境作りに徹底している。またクラブ活動もあり、利用者の方の要望に合わせた介護を行うことで、利用者の方を尊重していた。この施設で送る生活には「自由」があるように思えた。

マモリエあいらさんとは別に、小規模多機能ホームさざんかにも伺った。小規模多機能ホームはその名の通り通所や訪問、泊まりといった多くの機能を持ち柔軟なサービスを受けられる施設だ。住み慣れた家で、自分のことをよく理解している人から安定して柔軟な介護を受けられるとなれば、地域における需要は高くなる。多機能である分定員にも限りがあり、小さい規模で運営しているため今後増加していくだろう。

さて、ここまでいくつか訪れた施設についてまとめたが、最後に今回の研修で私たちが長い間お世話になった住宅型有料老人ホーム、エスプリ鹿児島あいらについて述べたいと思う。エスプリ鹿児島あいらさんは今年の 3 月に設立されたばかりであり、研修時時点で設立から 5 ヶ月の施設だった。普段の大学の授業や、今まで述べてきたような研修先では、ある程度形になった様子を学ぶが、エスプリ鹿児島あいらさんはまだ設立して日が浅いため将来性があり、最初の試行錯誤の段階を見ること

ができたため、非常に新鮮なことが多く、勉強になることも多かった。施設内の空き部屋に泊まらせていただけたことで、普段のデイサービスやイベントを始め、それ以外の時間帯における職員の方や利用者の方の様子を見ることもできた。エスプリ鹿児島あいらさんのおかげでとても充実した研修となったことは間違いないだろう。

では、私が今回の研修で学び得た「自由」とは何だったのだろうか。結局のところ文字通りになるのだが、自分の意のままに生きられることこそが「自由」なのだと思う。そしてその「自由」のためには、相手の要望に合わせて理解しまた尊重し、それらに基づく包括的な援助が必要なのだと思う。更にそれだけでなく、最も大切なことはその人自身が「自由」のためにどのような行動をするかではないかと思う。もちろん行政や社会福祉法人、地域から包括的な支援があった上で、更に自身が「自由」を求めることが何よりも大切なのだ。エスプリ鹿児島あいらさんのエスプリは、「気の利いた」「ウィットに富んだ」という意味でつけたそうだが、福祉による援助はそれぐらいがいいのだと思う。